

わたしたちは生まれなかったのかもしれない

若松 由希久

年の瀬も押し迫ったある日、祐一は母親の夢を見た。

夢の中で母親は、居間のこたつに入ったままうたた寝をしていた。顔を伏せている天板の上には、食べかけのみかんと広げられた婦人雑誌。呼吸に合わせて上下する、あずき色の綿入れを着た母親の背中が、妙にちんまりとして見えて、祐一はひどく頼りない気持ちで目を覚めたのだった。

年末年始の休みのあいだに自宅のできる仕事をとにかく片付けてしまおうと考えていた祐一が、突然に翻意して実家へ帰省することにしたのは、その夢のせいである。

山陰へ向かう列車は乗客であふれていた。それでも祐一は、ひとつだけ空いていた窓際の席を目ざとく見つけ、人の間を縫うようにしてすべりこんだ。このフットワークの軽さ、これが独り身のいいところだな。などと祐一は自嘲してみる。――安世がいたら座れなかったな。

離婚してから初めての帰省だった。シートに深々と身を沈めつつ、今年は本当にいろんなことのあった一年だったと、祐一は考える。しかし祐一にとってその多くは嬉しくない出来事だった。

まず二月に父親が死んだ。年初に米寿の祝いをしてまもなく大腸にがんが見つかり、入院したと思ったらあっという間に亡くなってしまった。

七月に安世と離婚した。別れること自体は何年も前から考えていたのだが、なかなか言い出せないでいたのだった。父親のことがあって、後始末が全部済んだとき、ちょうどいいタイミングのような気がして話を切り出してみた。安世の方でも同じように考えていたらしく、離婚はすんなりと決まった。

九月になって新しくできた事業部へ異動した。その責任者として抜擢されたのだ。一応は栄転と言えるが、会社としても新規の事業なのでノウハウがなく、暗中模索といった状態の中、早期に結果を出すよう求められる祐一の立場は苦しかった。休みらしい休みもとれないまま、今日に至っている。

十一月には誕生日を迎え、五十歳になった。人生において何をなすこともないまま、とうとう俺は五十歳になってしまった……そんなふうにしか思えないのは、もちろん心愉快的なことではない。

発車時間まで数分あった。祐一は自販機で買ったペットボトルのコーヒーをひとくち飲むと、窓の外に目をやった。線路をはさんだ向かい側、上りホームは空いている。こちら側の混雑とは大違いだ。見るともなしに、ホームに立つまばらな人影を眺めていく。その祐一の視線が、あるところであと、とまった。

男の子が立っていた。五、六歳くらいに見える。むくむくした黄色いダウンジャケットを着て、大きすぎるリュックサックを背負っている。周囲に大人の姿はなく、ぽつんとしていた。あんな小さい子が一人で鉄道に乗るのだろうか。ひよつとすると迷子かもしれない。そんなことを考え、やや心配になり見ていると、不意に、その子と目が合った。男の子は、なぜかまっすぐに祐一を見つめてくる。その表情に、不安の翳はない。

この子の顔に見覚えがある、と祐一は思った。それとも知っている誰かに似ているのだろうか。しかし誰に？ そう考えて、最初に浮かんだのは安世の顔だった。目尻の少し釣り上がったところ、ぽつてりとした唇……たしかに安世に似ている。でも、安世だけじゃない。安世よりもこの子は……そう、俺に似ているんだ。どこがどう、とは言えない。自分自身の顔には、他人の顔に感じるような明確な印象は持てない。でも、似ている。似ていると強く感じる。

安世との間に子供がいれば、こんな子だったかもしれない——。その思いつきは、かすかな痛みをともなって祐一の胸に迫った。

ひとつ年下の安世と結婚したのは三十代の終わりだった。結婚後、一年経っても子供ができず、不妊治療のクリニックに通った。夫婦とも肉体的に大きな問題は見つからなかったが、自然妊娠はせず、人工授精の試みを繰り返した。期待と落胆の月日が流れた。最終的には高額な体外受精まで試みたものの、やはりうまくいかなかった。このときの失望は大きかった。安世は頻繁に仕事を休むようになり、心療内科に通い始めた。

もうやめよう、と言ったのは祐一だ。祐一は四十五歳、安世は四十四歳になっていた。子供には縁がなかったんだよ。別にいいじゃないか。いつまでも夫婦水入らずで、楽しく暮らそうよ。恋人同士みたいに。若い気持ちのまんまで……。少しの沈黙のあと、安世は同意した。それならわたし、旅行がしたい。温泉めぐりがしたい。スキューバもやってみたい。——久しぶりに見る安世の笑顔だった。

けれどもその日から二人の関係は冷えていった。子供をつくる、という共通の目標がなくなったせいかもしれない。祐一にはよくわからない。とにかく、表立って喧嘩をするようなことはなかったが、目に見えて会話は減っていった。当然のようにセックスも

しなくなった。正月休みに祐一の実家に帰省する以外、結局旅行らしい旅行にも行かなかった。

もともとの計画では、安世の四十五歳の誕生日まで不妊治療を続けるはずだった。しかし祐一は、疲弊していく安世の姿をそれ以上見続けることに耐えきれなかったのだ。一年繰り上げての中止。だがその判断は、本当に正しかったのだろうか。

あと一年……無理をしても、予定通りあと一年がんばっていたら、どうだったろう。たしかに四十五歳というのはギリギリの年齢かもしれないが、それでも妊娠し、無事に出産する女性は世の中にいくらでもいるのだ。自分と安世の間に奇跡が起きなかったと、誰に言えよう。それは、祐一が数限りなく反芻してきた考えだった。

自分たちが諦めたあの一年にも子供が生まれていたら、ちょうどあれくらいの齢になる。

その子を見るほどに、自分と安世に似ているという感覚は大きくなっていった。祐一は、男の子と向き合っていることに次第に居心地の悪さを覚え始め、窓から目をそらした。

それにしても、あの子の親はいつたどこにいるのか。あんな小さな子を一人にして、心配じゃないのか。気分を変えようとして、無理にそんなことを考えてみる。

「パパ？」

なじみ深い声がして、祐一は顔を上げた。通路に安世が立っていて、自分を見下ろしている。怪訝な表情をして。

「何よ。パパ、自分だけ座っちゃって」

一瞬、何が起こったのかわからない。なぜ安世がここにいるのだろう。それにパパってなんだ。安世は俺のことをいつも「祐くん」と呼んでいたはず――。

いや、それは以前のことだ。祐一は徐々に思い出していった。幽体離脱した魂がゆっくりと肉体に戻っていくように、本来の自分、正しい自分がどこから戻ってきて、今までの虚ろな自分に重なっていくように感じた。

そう、子供が生まれてから俺たちは互いを「パパ」「ママ」と呼び合うようになったのだ。ひたすらにづらい思いが続いた不妊治療、ほとんど諦めていた最後の一年だった。あの年、たしかに奇跡は自分たち夫婦に訪れたのだ。

あの子供……俺がこの世界になした、ただひとつの価値あるもの。

「淳平。ねえ。パパ、淳平はどこ？」

じゅんぺい。そうだ。そんな名前だった。淳平。俺と安世の子供。もちろんだ。忘れるはずもない。

祐一は周りを見た。隣の席にはサラリーマン風の男性。淳平の姿はない。自分は本当に妻も子も放っておいて一人で座っていたらしい。だがそもそも、淳平という子供はどんな容姿をしていたのか。

「いないの？ ウソでしょ？」

祐一の様子を見て、安世が急にうろたえ始めた。

「トイレに行くから、ちゃんと見ておいてつて頼んだじゃない！ もう！ 信じられない！」

安世のヒステリックな声に自分のミスの重大さを知らされる。だが直後祐一は、ハッとして窓の外を見た。

黄色いダウンジャケットの男の子は、まだそこに立っていた。窓越しに、祐一をじっと見ている。男の子は右手を上げ、遠慮がちにひらひらと振った。口元に親密な笑みを浮かべて。――祐一は今度こそはつきり思い出した。あの子が淳平だった。

インターホンの音に、恵美子は目を開いた。こたつで婦人誌をめくっているうち、いつのまにかウトウトしていたものらしい。玄関の方から子供の声が聞こえた。息子の家族が帰ってきたのだ。

こたつの天板に手をついて、よいしょと言いながらやつと立ち上がる。八十歳を過ぎ、床から立つことがかなり困難になっていた。しかしいったん立ってしまえば、まだまだ健脚だと自分では思う。いそいそと玄関へ向かった。顔がほころんでくるのを抑えきれない。

ドアを開けると、

「ただいま帰りましたー」

安世の明るい声がした。いつも最初に挨拶をするのは安世だ。息子と孫はあいまいな笑みを浮かべて、嫁の両隣に立っている。

「遅くなってすいません。お昼までには着くって言ってたのに」

「いいのよいいのよ。大事な用があるわけじゃなし。気にしないで」

リビングへ連れ立って歩きながら、安世の話を聞いた。駅でちょっとしたアクシデン

トがあつたらしい。

息子家族をリビングに座らせると、恵美子は隣のキッチンへ入った。ショートケーキを人数分買つてある。あとはお茶の用意だ。祐一はコーヒー、安世さんは紅茶、淳ちゃんのココア、私は緑茶――。

「この子つたら、普段は怖がりなのに、急に大胆なことをするんだから」

「へえ、誰に似たのかねえ」

お茶を入れながら、恵美子は背中ごしに話を続ける。

「……そういえば祐一も子供の頃、急にいなくなつて大騒ぎしたことがあつたよ。あれは小学校に入る前だつて。ドラえもんの映画を見に行った帰り……ねえ、祐一」

「そんなことあつたかな。覚えてない」

「あつたのよ。駅ではぐれて、あんただけ反対側の電車に乗っちゃつて」

「えーっ、淳平とおんなじことしてるじゃない」

安世の驚いた声に、みんな笑つた。

「ほんとに、似た親子もいたもんだよ」

お盆を抱えて、恵美子は振り返つた。リビングには誰もいなかった。こたつの上に、さつきまで見ていた婦人雑誌が広がっている。お盆の上にはショートケーキがふた切れ。緑茶の入った湯呑み。ただそれだけ。

そうだ。私は昔から甘いものに目がない。和菓子より洋菓子が好きで、とくに生クリームたっぷりのショートケーキ。医者にはよくないと言われているが、やめる気はない。午後に雑誌をめくりながら、あるいは韓国ドラマの再放送を見ながら、誰に気兼ねすることなくひとりで食べるケーキは最高のぜいたくだと思う。――思う？　そう、なのだろうか。

何かがピンとこない気がした。自分の思いが自分にうまく重ならない。そんな奇妙な違和感を覚えながら、恵美子はショートケーキのひと切れを仏壇に供え、手を合わせた。仏壇には、今年の二月に亡くなった夫の位牌がある。二十代の初めに結婚して、ほぼ六十年近く連れ添つてきた夫だった。結婚生活にはいろんなことがあつた。もちろんだ。それは、他人に対しても自分に対しても、語るとすれば「いろんなことがあつた」としか言いようのない、そんな時間の重なりだった。

夫の堂々とした位牌の隣にもうひとつ、遠慮がちに立つ小さな位牌がある。かなり古いものだが、長年きちんと手入れがされており、戒名の文字の白さも鮮やかさを失つて

いない。

夫婦には子供がなかった。いや、一度だけ妊娠はした。結婚から十年が過ぎ、夫婦とも諦めかけていた頃のことだ。恵美子も嬉しかったが、それよりも夫の喜びようといったらなかった。「もうけものだ、もうけものだ」と口癖のように言った。

けれど流産した。妊娠三ヶ月になる手前だった。別に何があったわけではない。恵美子もし誰かに聞かれたなら自信を持つて言えるが、母体に無理な負荷をかけるようなことは決して、何ひとつしなかったのだ。夫は会社が引けると飛んで帰って家事の手伝いをしてくれた。その時代には珍しい男だった。

にもかかわらず、ある日の午後、なんだか腰のあたりがだるいと思っていたら、急に下腹が痛み始め、多量の出血とともに子供が流れてしまったのだった。

生まれてくる予定の子には、あらかじめ「祐一」という名をつけていた。なぜか男の子だという確信が、恵美子にはあったのだ。そのことを恵美子が告げると、夫はかけらほどの疑念もしめさず、妻と確信を共有した。夫婦が正しかったことは流産によって証明された。

結局、二度と恵美子の体に子は宿らなかった。

あの三ヶ月は何のためにあったのだろうか？ 恵美子はずっと考えてきた。文字通り天に昇るような幸福感と、それを上回る失望、悲しみ。まさに与えられたと思ったら、次の瞬間にはもう奪い取られていたのだ。あの三ヶ月の意味。いくら問いを繰り返しても、答えは出ない。

痛みは時間が和らげてくれるだろうと、夫婦は互いを慰めあった。実際、ある程度まではその通りになった。夫が定年退職してからは、夫婦でいろんなところへ旅行に行った。温泉めぐりをした。沖縄ではスキューバまでやった。ほとんど幸福とっていい人生だったと思う。

だが夫が突然に亡くなってからしばらくして、また考えるようになった。あの三ヶ月、祐一と名づけた命がたしかに自分のこの体の中に生きていたこと。その子は、どうして生まれてこなかったのだろう。何も落ち度はなかったはずだ。私にも。夫にも。結局取り上げてしまうのなら、なぜ最初から与えたりしたのだろう。いったい何の意味があったのだろう。私を訪れた祐一は、どこへ行ってしまったのだろう。

問うことは傷つくことだとわかっていて。しかし問わずにはおれないのだった。

年が明けて正月。またこたつでウトウトして、恵美子は夢を見た。ほんの短い夢だったが、とても印象に残る夢だった。夢の中でも恵美子はこたつで眠っていた。その眠っている恵美子を、テレビに映る人物を眺めるように、恵美子自身が眺めていた。眠る恵美子は、スー、スー、という寝息のひと呼吸ごとに、倍の大きさ、さらに倍の大きさへと、膨張を始める。ほんの幾度かの呼吸であつというまに宇宙全体と同じ大きさになつてしまう。それでも恵美子は、ふくれあがつた自分に気づかないまま、こんこんと眠り続けている。そして夢を見ている。それは子供の夢、子供たちの夢だ。自分が生んだ子が、成長し、また子を生む。その子がまた子を生む。その営みが繰り返される。数限りなく。一瞬のうちに。

目が覚めてから、夢の鮮明な印象が消え去ってしまうまでのわずかの時間に、恵美子は次のようなことを考えた。もちろんこのような形而上的なことをはつきりと言語化したわけではない。もっと漠然とした、言葉以前の思いに過ぎないのだが、無理を承知で筆者の言葉に置き換えるなら、おおむね次のようなことだ。

この宇宙は、開闢から現在まで、誰ひとり、何ひとつ生まなかったし、このさき未来永劫に至るまで、決して生まないのかもしれない。その宇宙、何者も生み得ない宇宙、あえて名づけるなら、不妊の宇宙が、こんこんと、永遠の眠りを眠りながら、わたしたちの夢を見ている。わたしたちの存在とはそういうものではないか。

わたしは生まれなかったのかもしれない。わたしたちは生まれなかったのかもしれない。